

民進党の敗北なら危機も

来る三月二十日の台湾総統選挙は、台湾の命運を左右する大きな意味を持っている。日本の国益にも関わる岐路になるかもしれない。

与党は陳水扁総統・呂秀蓮副総統の民進党現職コンビ、野党は連戦主席（国民党）・宋楚瑜主席（親民党）が正副総統候補だが、今回は誰が総統・副総統に選ばれるかという関心以上に、台湾人の政党である民進党が勝つのか、中国人の政党である国民党が奪回するのかがという選択だといつてよい。この場合の国民党は、李登輝前主席を排斥した非台湾的政党である。

李氏を後ろ盾とする台湾團結連盟（台連）は、この2・28事件記念日の午後2時28分に、百万人が手をつないで台湾を一周する「手護台湾運動」を繰り広げて民進党を応援する。

総統選の帰趨は予断を許さず、かなりの接戦も予想されている。仮に民進党が敗北し、中国が期待する国民党・

親民政権が誕生すれば、李登輝前総統が十二年間にわたって蓄積してきた台湾民主化と台湾人としてのアイデンティティー深化の路線が大きく揺らぐことになる。そうなれば、近年ますます強大化する

親民政権が誕生すれば、李登輝前総統が十二年間にわたって蓄積してきた台湾民主化と台湾人としてのアイデンティティー深化の路線が大きく揺らぐことになる。そうなれば、近年ますます強大化する

国益踏まえ、強くアメリカ説得を

つつある中国が台湾を呑み込むことにもなりかねない。台湾の民主化と一口にいうが、その歴史的意義は計り知れない。四千年にわたり皇帝型権力政治を維持してきた中華世界そして華人社会において、台湾は民主政治を初めて実現したのである。

そして、民意に基づく政治とは、自らの選択によって自らの国家を運営する意思と権利を獲得することにほかならない。この肝心な点において、台湾を一度も統治したことのない中国が呼号する「一つの中国」は、完全に意味を失うのだといえよう。それゆえ中国は、あらゆる軍事的・外交的な策を講じて台湾の併呑を狙っているのだ。

そして、民意に基づく政治とは、自らの選択によって自らの国家を運営する意思と権利を獲得することにほかならない。この肝心な点において、台湾を一度も統治したことのない中国が呼号する「一つの中国」は、完全に意味を失うのだといえよう。それゆえ中国は、あらゆる軍事的・外交的な策を講じて台湾の併呑を狙っているのだ。

再評価される歴史的体験

その台湾の存在は、日本の国益にとっても決定的に重要な意味をもっている。台湾は日本にとって地理的にも地政学上もきわめて重要な位置に

つて、かけがえない利益をもちたらしめている。

しかし、台湾がわが国にとって重要なのは、単に安全保障上の意義にとどまらない。台湾では二千三百万の国民の大多数がきわめて親日的であ

を教育、衛生、水利灌漑、農業改善などの社会改造の面から高く評価してくれる存在は台湾をおいてないのである。

李登輝前総統などは、まさに旧制台北高校の教養主義が育成した人材にほかならない。

論 正



国際社会学者 中嶋 嶺雄

あり、ここに近代的な自由と民主主義の国家が存在することと自体が、日本にとっての国益なのである。最近海洋覇権のみならず宇宙覇権も確立しようとしている中国の世界

戦略下で、台湾海峡が中国の内海のようになると公海としての自由が奪われるといったことを防ぐうえでも、台湾の存在はわが国の安全保障にと

り、また最近自らの歴史を中国史としてではなく台湾史として編纂し、五十年間にわたる日本の台湾統治の実績を高く評価しはじめていからである。

今年日露戦争開戦百周年、日本が戦後六十年を経てようやく自らの近現代史を相対化しなければならぬ時期に、日本の植民地統治の功績

最近朝鮮の近代化と経済発展にとっての日本の植民地統治の役割を客観的に評価するC・J・エッカート教授（ハーバード大学）のような著作（邦訳『日本帝国の申し子』、草思社）も出ている

が、台湾の人々は自らの歴史の体験として証言してくれている。日本としては大いに感謝しなければならぬ。

近づく台湾総統選の意味と日本

なぜ日本政府は冷淡なのか

それなのに、日本政府・外務省は台湾に対して依然として冷淡である。去る十二月二十九日には、こともあろうに中国側の立場から外務省出先の交流協会台北事務所長が、総統選挙と同時に実施される住民投票と、将来の憲法改正の投票に関して慎重を期すよう、台湾総統府に向いて申し入れ、そのことを記者団に公表したのであった。

きわめて軽率かつ露骨な内政干渉であり、選挙介入である。外交上も事柄はきわめて重要なルール違反なのに、わが国では国会でも取り上げられないのはなぜだろうか。

ブッシュ米大統領もシラク仏大統領も同様の懸念を表明しているとはいえ、だからこそ日本は台湾の立場を擁護し、イラク戦争での対米協力の代償としてアメリカの台湾政策が揺らぐことのないよう強く説得すべきではないか。

なんといいながらも台湾の存在をもっとも必要としているのは、わが日本だからである。

（なかじま みねお）